

リモートな現地調査

小山 祐実*

国内調査ならできる？

2021年1月7日、宮崎県独自の「緊急事態宣言」が発動した。2日前に宮崎市入りしていた私は滞在先でこのニュースを知った。早速、調査地である宮崎県串間市に住む知り合いのSさんに電話をした。数年前、釣り人の紹介で知り合い、昨年11月に串間市の自宅へ訪問させてもらった方だ。彼は紆余曲折あって宮崎の山奥でドッグシャンプーを製造している。「いやあ、状況が悪い」少し口ごもってから続けた。「移動したほうがいいよ…荷物まとめて京都に。」

私は人口800人余りの串間市市木地区(旧市木村)で狩猟者とイノシシ狩りの調査をするために42日間の計画を立てていた。Sさんは、東京から奥さんの実家のある市木に移り住み、自営業の傍ら、半ば家業であるイノシシ猟をしている。

「確かに現在の状況は深刻だと思いますが、隔離期間を設け、高齢者の方とは接触しません。万全の対策をします。何か他の調査方法があるはずですよ。どうか行かせてください。」

ここで引き下がるなんて論外だと私は思った。とは言ったものの、調査対象は8割近くが高齢者であった。翌朝、登山リュックを担ぎ、スーツケースを引きずりながら、電車に乗って目的地へ乗り込む。こうしてはじめてのフィールドワークが辛うじて始まったのだった。

孤独なフィールド

市木にはサル芋の芋洗いでも有名な幸島があり、満天の星空と亜熱帯植物に囲まれ、波の音が聞こえてくる。そんな海岸近くにある京都大学野生生物研究センター(WRC)の施設で、私はひとり途方に暮れていた。誰もいない砂浜やあぜ道でジョギングをしているところを目撃されると、よそ者である私の話があっという間に村中へ広まってしまう。京大への不信感や県外者に拒否感をもっていそうな人、都会や若者に好奇心をしめす人、あるいは噂好きのマダムたち。日を追うごとに、周りの目がより一層強くなる感じがした。

広大なこの過疎地域でこれほど身動きが取

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 平成30年度814人『令和元年串間市統計書』。

れないとは考えもしなかった。常に注がれる視線、誰にも会えない現地調査。はじめは長いと思った隔離期間は刻々と過ぎていく。こうなれば、いっそ目立ってしまおう。2週間後、釣り人を装い、地元の人たちが集まる海辺の茶店に通うことにした。

Sさんの語り

「うちの地元じゃ、『なんだバカ野郎』が挨拶なんだよ」と東京足立区は千住の下町で育ったSさんは言う。「俺は鉄砲が嫌いだけどね。ここに来たとき、市木のおじいちゃんたちに何やってるのか聞いたらみんな猟をしてるって言うから、それをやればいいと思った。」「カモ撃ちとイノシシ猟やってる人は結局、全部獲りたい人なんだ。」「よそ者が何やってんだって言う奴がいるけど、やり続ければあきらめがつくでしょ。」

10年前、奥さんの実家に移り住んだSさんは、ドッグチャンプーの製造販売をしながら、市木では当たり前に行っているイノシシ猟に参加することを決め、地元になじもうと



写真1 幸島と石波海岸
写真の裏手に茶店がある。

した。はったり上等の世界で生きてきたSさんはこの町ではよく目立つ。しかし、猪肉、養蜂、シャンプーの販売を通じて、保守的であるが自然の中での暮らしのある市木をもっと県外の人知ってもらい盛り上げようと奮闘している。

彼の口から発せられる言葉自体には、ほとんど真意は含まれていない。けれども、その言葉の端々には彼が実現したい強い思いが確かに内包されている。それを汲み取るには常に翻訳作業が必要だった。

言葉が通じて

接触が無理ならば、聞き取り調査はできない。質問紙をつかったアンケート調査に丸ごと変更するしかなかった。こういった調査に不慣れな高齢者については、Sさんが話を聞いて代筆してもらうことになった。数日で14名分のアンケートが返って来た。調査対象者の大半は前年11月の予備調査で会ったことがあったので、その顔を思いうかべながら「〇〇さんは大人しく控えめな人だが、猟をすることで農家さんを助けたいという思いがあったのか」などと感心していた。ところが、Sさんが書いたと思われる用紙を見ると、何かがおかしい。「質問：猟で得た猪肉は誰とどのように分配しますか」「回答：分ける」「質問：今期の猟の成果やイノシシの変化（増減など）について教えてください」「回答：昔のキジ猟」これはまずい。

その他にもアンケート調査の信憑性を疑うような回答が散見された。そういえば、Sさんもそうだったが、この地域で猟の名手と呼

ばれているその義父のIさんの話にしても、数えきれないほど獲ってきたイノシシのこととなると毎回ストーリーが違っていた。まゆつば話が飛び交う中、一番近くで2人のことをよく知るSさんの妻Kさん、つまりIさんの娘にこっそり連絡を取った。

Sさんのように親身に相談にのってくれ、いろいろなことを教えてくれる協力者がいることは、フィールドワークをおこなううえで大きな利点であるが、特定のひとりに依存するのではなく複数の情報提供者がいることが重要だと、このとき実感したのだった。

情報のバランスを取る

まずはKさんに事情を説明し、Kさん自身に夫と父へ同じ項目について聞き取りをしてもらった。また、動物を殺めることに肯定的でない彼女の視点から、狩猟に打ち込む2人の姿や尊敬できる部分について直接語ってもらったり、他の調査対象者に電話などで回答の確認や追加の質問について聞き取りをしてもらった。

また、私自身も地元の豊富な郷土資料を読み漁って聞いた話の裏を取ることにつとめた。土地、歴史、動植物、行政、人、ある地域を知るうえで必要な要素を調べ、外堀を埋めながら、アンケートで得た情報を立体化させる努力をした。さらに、森に入って獣道やイノシシの糞を探し、田んぼを歩いて農家さんに農作物被害の話聞き、茶店に来る人には獣害や動物のことを聞くなど、できるかぎり生の情報を得ようとした。

それでも、想像していたフィールドワーク

には程遠く、なかなか期待した結果は出ない。猟師の多くは高齢者で、車を15分も走らせば会うことができる場所まで来ているのに、何重ものフィルターを通してしかデータが手に入らないのだった。

リモートとローカル

人の発する言葉には勘違いや曖昧な情報が数多く含まれている。したがって、さまざまな側面からデータを精査することにより、その「根拠」を確保しなければならない。たとえ対象者を目の前にしていたとしても、情報がゆがめられてしまうことがある。たとえば、自分が正しいと思う考えを強調しすぎたり、自分のおこなった行為を正当化しようとしたり、恥ずかしいことは望ましいシナリオに書き換えたり。そういった個人の期待、虚勢、秘密などのバイアスによって、無意識のうちに「現実」が創造されることはよくある。

そうはいても、実際のフィールドワークでは、こういった留意点を心に留めながら人々の感情や性格、コミュニティ内での立ち位置、その日のテンションといった非言語情報を探ることにより、ひとつひとつの発言に信憑性を与えて「データ」にすることができる。

ところが今回のようなリモート調査ではどうだろう。たとえばIさんへのアンケートでいえば、依頼したSさんが質問するとき、またIさんが回答するときに情報のゆがみが生じ、さらに質問紙に回答を記入するSさんの視点と解釈が加わっている。私が用意した質問の意図が正しく伝わっているかどうか分

からない。質問と回答にかかわる微妙な非言語情報は私にはまったく分からず、コミュニケーションはすっかり屈折してしまっていた。

もちろん、ローカルな現場で人と会っておこなう調査でも、情報のゆがみは常に生じているにちがいない。今回、リモート調査を強いられたことで、図らずも、その危険性をまざまざと実感することができたことは、はじめてのリモート・フィールドワークの収穫だったといえるかもしれない。

フィールドワークのこれから

1年以上にわたり、連日 COVID-19 の話を耳が痛いほど聞かされているが、まだどこかで「いつか終わる」、「あと少し辛抱したら元に戻る」といった期待を、私を含め多くの人々が抱いているのではないだろうか。そうした期待をもちつつ、当面は日本のフィールドで調査をしようと私は考えていた。しかし、これまで書いてきたように、日本でなら

ばなんとかフィールドワークができる、ということではなかった。今後も、アフリカやアジアで、今までどおりフィールドワークができる日が戻って来るのだろうか。

コロナ騒動はひとつの転換点として、以前のようにフィールドワークが当たり前に行えるという前提を再考しなければならないのかもしれない。リベラルで一筋縄ではいかない S さん、自信家で豪快な I さん、地域と家族を第一に想う K さん。新しいかたちのフィールドワークがありうるのだとすれば、誰とどのようなコミュニケーションをとることになるのだろう。そのとき、生きた人間、生きた世界をつぶさに観察するという ASAFAS の強みをどうやったら残していけるのだろうか。リモート調査を取り入れることで、そのアドバンテージを保ち続けることができるのだろうか。コロナ禍の中で、フィールドワークの可能性について、個々人がより一層真剣に考えてみる必要があるだろう。

人が住む世界と野生動物が棲む世界との境界線はどうあるべきか

—屋久島からガボンへ—

大坂桃子*

ポンカン・タンカンの里，屋久島

鹿児島県南方に位置する屋久島は、世界自然遺産の島である。「もののけ姫」の舞台といわれる苔むした深い森や屋久杉の老木など、神秘的で雄大な自然で知られる。島の約90%は森林に覆われており、九州最高峰の宮之浦岳をはじめとした山々が連なる。そうした大自然に魅せられて、毎年多くの観光客が屋久島を訪れている。

一方で、屋久島にはあまり広く知られていない「ポンカン・タンカンの里」という一面がある。わずかな平地が広がる海岸線沿いには、1周約100kmの島一周道路が通っており、その道路に沿って24の集落が点在している。集落ごとに独自の歴史があり、気候や主要産業、方言ですら驚くほど違う。これらの集落では農業が盛んに行なわれており、ポンカン・タンカンという2つの柑橘類が、主要な農産物となっている。

ポンカンは、大正13年に台湾から導入され、お歳暮の品として人気を博してきた。タンカンはポンカンとネーブルオレンジの交雑種であり、ポンカンに比べて甘い。タンカンの導入はポンカンより遅く、戦後になって栽

培がはじまったが、今ではポンカンからタンカンへの転換が進んでおり、ポンカンを凌ぐ勢いである。果樹園の多くは、集落から山に向かう傾斜地を利用して造成されている。

ポンカンの収穫期は12月、タンカンの収穫期は1月末から2月末頃である。この時期になると、近所の人や本州に渡った親戚などが応援にかけつけ、果樹園は賑わいをみせる。スーパーにはお弁当が大量に並び、集落の放送からは収穫への激励の言葉が聞こえてくる。一旦仕事を中断してみんなでごはんやおやつを囲みながら談笑する時間は、楽しいひと時である。



写真1 屋久島の集落に広がる果樹園の様子
写真を撮ったのは1月中旬、もうすぐタンカンの収穫である。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

サルがポンカン・タンカンを襲う

そんなポンカンやタンカンを巡って、人間と競合する動物たちがいる。その代表格が、ニホンザル *Macaca fuscata yakui* である。屋久島は、「人2万、サル2万、シカ2万」といわれたほどニホンザルの多い島である。かつてのニホンザルは専ら山で生活する動物であり、1960年代頃まで集落でみられることはほとんどなかったという。しかし1980年代になると、その関係性に変化が訪れる。広葉樹林のスギ植林化や果樹園の拡大、農業従事者の減少や高齢化などが引き金となり、ニホンザルが集落に出てくるようになったのである〔揚妻 1998〕。その結果、柑橘類を中心にニホンザルによる農作物被害が増大して問題となり、現在に至るまで続いている。ニホンザルの被害に耐え切れず廃園になった農園も多数あり、草の茂った薄暗い農道を何とか辿っていくと、果樹がどこにあったかすらわからないほど荒れ果てた草が広がっていることもよくある。ニホンザルを捕獲するために据えられていた罠の残骸が、かつてそこ

でニホンザルと戦った人々がいたことを教えてくれる。現在も被害に苦しむ農家は、「このままいくと農家はいなくなってしまう」と語る。

しかし人間の側もただやられているだけではない。屋久島の集落には、至るところにサル避けの電気柵がみられる。実に24集落中21集落が電気柵を整備しており、その中には30年以上前に設置されたものも存在する。集落によっては、この電気柵を効果的に用いて被害の軽減に成功しているところもある。ポンカン・タンカンの里に住む人々にとって、電気柵は今や当たり前の光景になっているのである。

電気柵という境界

電気柵の設置形態は、集落によって異なる。果樹園ごとに囲んでいるところもあるが、大規模な電気柵の設置を行なっている集落の多くは、山と集落の間に電気柵を引き、集落全体を囲むような集落柵を設置している。その様子は、まるで人間の世界とニホン



写真2 ニホンザルによる被害跡
タンカンの皮や果皮が散らばっている。



写真3 集落と山の間に引かれた電気柵

ザルの世界に境界を引いているかのようであり、島の外から来た私に不自然な印象を与えた。ニホンザルの生態調査をしようと山に入る時は、電気柵を開け閉めして山に向かう。戻り時のために出入口の場所を覚えておかないと、電気柵に引っかかって集落に戻れないということになる。集落柵をもつ集落の人たちは、当たり前のように柵の中で農作業をしている。しかし柵の外側を歩いていると、ひっそりとかつての道と思われる跡や祠が残されていることがある。

しかしそうした電気柵も、完璧な境界になっている訳ではない。少し油断をすると、亜熱帯の森は電気柵を飲み込んでいく。多くの果樹園は斜面にあるため、農家の高齢化も相まって管理がとても難しい。個人での管理に加え、集落の事業として年に数回みんなで柵の点検を行なうなど工夫しながら維持をしているものの、ほころびも多い。ほころびは、ニホンザルを人間の世界に招き入れる。柵の上に伸びた枝、川や道路を避けて柵が途切れた部分、電線につるが絡まったままになっている箇所、過去の落石や倒木でゆがんだ柵の隙間…ニホンザルはそんな場所を見逃さず、果樹園に入ってきて、ポンカン・タンカンを食べってしまう。農家はそうしたほころびを補うために、農地で犬を飼ったり、ロケット花火を鳴らして追い払いをしたり、はたまた被害の大きなところでは1日中果樹園を見張ったりと、ありとあらゆる工夫をしている。しかし、サルとの知恵比べはそう易しいものではない。今年育てていたタンカンの木をすべてニホンザルにやられ、収穫でき



写真4 管理されず倒れて使えなくなっている電気柵

なくなったある農家は、寂しそうに「ここではサルが強い」と語った。

こうして、屋久島におけるニホンザルと人との間の境界は、かつて集落から山にかけて広い幅をもって曖昧に存在していたものから、集落の際に細くはっきりと引かれた電気柵に変化した。そして現在、その境界に生じたほころびを通じて人とニホンザルとの厳しいせめぎ合いが起きている。

まだ見ぬガボンに思いを馳せて

私はもともとアフリカ中部ガボン共和国・ロベ国立公園周辺域へ行き、アフリカゾウの一種であるマルミミゾウ *Loxodonta cyclotis* と人との関係について研究する予定であった。新型コロナウイルスの影響が収まればガボンに渡航しようと、今でも準備を続けている。ロベ国立公園周辺域を含むガボン全域でも、マルミミゾウによる農作物被害が大きな問題となっている。マルミミゾウは、キャッサバやバナナなど多様な作物を対象に、壊滅的な被害をもたらす [Fairet 2012].

マルミミゾウによる農作物被害は、歴史的にみて新しいものではない [Barnes 1996]. ゾウと人とは長いあいだ同じ森の中で生活してきた。しかしガボンにおいても、近年になって農作物被害が問題視されるようになってきた。その背景として、国立公園が多数設置されたことにより、多くの地域住民が国立公園の縁で農業をする状況となったことが挙げられる [Ndong 2017]. また、農村部の人口密度が減少したり、局所的な土壌の劣化によって農地が分散したこと等も影響していると考えられている [Naughton *et al.* 1999].

ロペ国立公園周辺の村では、数年前にガボンではじめて政府による電気柵が整備された。さらに現在ガボン政府によって、11の国立公園周辺に50カ所の電気柵を整備するという巨大な事業が進められている [Afrik21 2019]. つまり、国立公園の制定や電気柵の設置等によって、マルミミゾウと人の生活空間の境界は現在進行形で変化している。ここでも、長年に渡って曖昧に保たれていた境界線が、電気柵のように細くはっきりとしたものへと急速に変わっていつているのである。

屋久島でフィールドワークをしていた時、ある農家に「アフリカではゾウの被害をどうやって防ぐのか」と尋ねられた。私が行く予

定の国では電気柵を使ってうまくやっているらしいと伝えると、「サルでも飛び越えてくるのにゾウにきくわけない、壊すに決まっている」と笑いながら一蹴されてしまった。果たして真実はどちらなのか、この目で確かめる日を心待ちにしている。

引用文献

- Afrik 21. 2019. <<https://www.afrik21.africa/en/gabon-solar-electric-barriers-to-protect-crops-from-wildlife/>> (2021年5月19日)
- 揚妻直樹. 1998. 「屋久島の野生ニホンザルによる農作物被害の発生過程とその解決策の検討」『保全生態学研究』3: 43-55.
- Barnes, RFW. 1996. The Conflict between Humans and Elephants in the Central African Forests, *Mammal Review* 26: 67-80.
- Fairet, EMM. 2012. Vulnerability to Crop-raiding: An Interdisciplinary Investigation in Loango National Park, Gabon. PhD Thesis, Durham University, UK.
- Naughton, L., R. Rose and A. Treves. 1999. *The Social Dimensions of Human-Elephant Conflict in Africa: A Literature Review and Two Case Studies from Uganda and Cameroon*. Gland, Switzerland: IUCN.
- Ndong, A. 2017. Human-wildlife Conflict and Ecotourism: Comparing Pongara and Ivindo National Parks in Gabon. Master Thesis, the University of Oregon, USA.

週末に「帰る」場所

—台北の「リトル・インドネシア」—

柴 山 元*

夕暮れの屋台で

ある日曜の夕方、筆者は夕飯に何を食べようかと思ひ悩み、街を彷徨っていた。傾きかけた太陽が、まだ沈みたくないと言わんばかりに最後の力を振り絞り、路地に立ち並ぶ店々を橙色の光で照らす。

「バクソ (*bakso*)¹⁾！ バクソ！ ガドガド (*gado-gado*)²⁾もあるよ！」

時計の針は6時半を指している。日が落ちるとともに、客引きの数も増える。

「サテ (*sate*)³⁾はいかが！」

道端でサテを焼く煙が目染みる。あたりにインドネシアの匂いが漂う(写真1)。

次々と声をかけてくる客引きの言葉に惑わされる。腹が減るにつれて、優柔不断な自分にだんだんと嫌気がさしてくる。だが、どんなうまいものを食おうかと悩むこの時間は、ワクワクのひとつときでもある。

「帰ってきたね。」

同行していたインドネシア出身の友人が、目の前の鍋で揚げられるアヤム・ゴレン (*ayam goreng*)⁴⁾を凝視しながら呟く。そう

だ、「帰ってきた」のだ。きっと、だからこそ余計にワクワクするのだろう。

だが、筆者と友人が「帰ってきた」場所はインドネシアのどこかではない。ふと後ろを振り向くと、横断歩道の向こう側に夕日で照らされて真っ赤になった台北駅の駅舎が見えた。

台湾の「インドネシア」

筆者が「帰ってきた」のは、台北駅の東隣に位置する小さな街区である。ここは「リト



写真1 焼きあがったサテ
右のビニール袋に入っているのはピーナツソース
(筆者撮影)。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

1) 牛肉のすり身から作られたインドネシア風肉団子。

2) 数種類の野菜を茹でたものに唐辛子入りのピーナツソースをかけたもの。インドネシア版野菜サラダ。

3) 鶏肉、羊肉、牛肉などを小さく切って竹串に刺して焼いたもの。インドネシア風の串焼き。ピーナツをベースにした唐辛子入りソースにつけて食べる。

4) インドネシア風フライドチキン。



写真2 リトル・インドネシアの屋台
インドネシア語やジャワ語が飛び交う(筆者撮影)。

ル・インドネシア」(標準中国語では「小印尼 *xiao Yinni*」)と呼ばれている。その名のとおりに、インドネシアの雑貨や食材を扱う商店とレストランが軒を連ね、週末になるとインドネシア出身者で大いに賑わう。横断歩道を隔てて、台北駅と目と鼻の先に位置しているにもかかわらず、台湾人がここを訪れる姿は滅多に目にする事が出来ない。そこは、あたかも異国のように台湾社会から隔絶された空間になっている(写真2)。

「あんたは本当に物好きだね、こんなところへ来て。」

アヤム・ゴレンを運んできた店員が、筆者を見ておもむろにそう言った。たしかに、リトル・インドネシアを訪れる台湾人をほとんど見たことがない(日本人の姿は一度も見たことがない!)。店員はこう続けた。

「多くの台湾人は、トコ・インドが集まるこの辺にあまり良い印象を抱いていないんだ。ゴミが散らかっていて、めちゃくちゃだから。」

たしかに、数時間おきに清掃員が回ってき

て床を綺麗にしていく台北駅構内とは違って、ここはゴミが散らかり放題である。台湾人がこのめちゃくちゃな場所に近づかないのも頷ける。だが、物好きな筆者としては、このめちゃくちゃな雰囲気、むしろ居心地の良さを感じる。

あちこちでインドネシア語が飛び交い、肉を焼く煙がもくもくと天にのぼる。日本の景色と似通った台北のコンクリートジャングルの中に突然と現れる「インドネシア」。そこにおもしろさを感じた筆者は、毎週末ここへ「帰る」ようになった。

台湾のインドネシア人

台北の町を歩いていると、インドネシア人の姿を頻繁に目にする。公園に行けば、ヒジャブをつけたインドネシア人女性が台湾人高齢者を乗せた車椅子を押す姿をよく目にする。休日に駅前へ行けば、ベンチに腰かけてインドネシア語やジャワ語で談笑している若者の姿を目にする。現代の台湾社会では、インドネシア人が町を歩く光景は、すでに当たり前になっている。

現在、台湾には26万人を超えるインドネシア人が居住している。そのうち25万人弱は、台湾に出稼ぎに来た労働移民である。その多くは女性であり、台湾人家庭に住み込みで働き、介護・家事労働に従事する。台湾の人口が2,360万人ほどであるから、台湾の人口の1%ほどがインドネシア人ということになる。

労働移民のほかに、国際結婚をきっかけとしてインドネシアから台湾に移動した婚姻移

民の存在も忘れてはならない。婚姻移民は累計で3万人ほどになる。さらに、近年では留学生も増加しつつあり、その数は1万人を超えている。このほかにも、インドネシアでの排華的政策から逃れるために、1960年代に台湾へ「帰国」した「帰国華僑」も存在する [玉置 2020]。このように、長い時間をかけて多くのインドネシア人が台湾へ移り住んできた。

トコ・インド

リトル・インドネシアには、インドネシア商店が立ち並ぶ。インドネシア商店は「トコ・インド (*toko Indo*)」という愛称でインドネシア出身者から親しまれている。トコ・インドという言葉は、もともとはインドネシアの店 (*toko*) という意味である。だが、台湾のトコ・インドには、商店のほかにレストランの機能を備えた店舗が多い。そのため、インドネシアの雑貨や食材を売る商店だけでなく、インドネシア料理を提供する店も、総じてトコ・インドと呼ばれる。

トコ・インドは台湾全土に点在している。台北や台中といった都市部であれば主要駅周辺に店が集まっており、少し町外れに行っても駅周辺や商店街にぼつりと店を出していることが多い。統計がないために総数は不明であるが、一説には台湾全土に少なくとも300のトコ・インドが存在するという [洪 2011: 74]。

トコ・インドにはさまざまな人々が集う。

トコ・インドを営んでいるのは、比較的早期に台湾へ移動した帰国華僑が多い。台湾人と結婚した婚姻移民がトコ・インドを営むケースも少なくない。一方、顧客の大部分を占めるのは労働移民だ。そして、留学生がアルバイトとして働くケースも多くみられる。

「土日だけ手伝いに来るのさ。平日は工場勤務よ。毎日仕事ってわけさ、楽しいからいいけど。」

店員がエス・チェンドル (*es cendol*)⁵⁾ を運びながらそう言った。話によると、彼は東ジャワから出稼ぎに来た労働移民で、工場での仕事がない土日だけトコ・インドの手伝いに来るといふ。土日のトコ・インドは客でいっぱいになる。インドネシア人が集まり、インドネシア語が飛び交い、インドネシア人が、インドネシア人にインドネシア料理を提供する。週末のトコ・インドには「インドネシア」が再現されるのである。

週末のシンデレラ

しかし、そのトコ・インドも、賑わいをみせるのは週末だけのことである。顧客の大部分を占める労働移民は、仕事がある月曜から金曜（もしくは土曜）までの間は、自由に出歩く時間を確保できない。それだけでなく、職場や居住スペース（家事・介護労働者であれば、大多数は雇用主と同居している）ではオシャレをすることもできず、プライベートな空間を確保することすら困難である。

その反動か、普段は作業着かTシャツし

5) ココナッツ・ミルク、緑色に着色したゼリー、かき氷、小豆などを混ぜたインドネシアの甘味。

か身につけない彼らは、週末になると着飾って町へ繰り出すのである。魔法にかけられたかのようにオシャレをして、息苦しい職場を抜け出し、友だちが集まる台北駅へ行き、楽しい時間を過ごす。トコ・インドで故郷の味にありつき、カラオケで懐メロを歌い、ギターをかき鳴らし、踊り狂う。門限ギリギリまで存分に楽しむ彼らは、まるでシンデレラのようなものである [Lan 2006: 169]。

夕食を終えて、筆者と友人は台北駅のロビーへ移動した。すでに夜8時前だ。日曜の夜、駅の人通りはまばらである。とりあえずロビーの床に座る。これも「インドネシア式」である。土日に台北駅に集まるインドネシア人は、なぜか皆ロビーに集まり、床に座っておしゃべりに興じる。この光景も、すでに台北では当たり前のものとなっている(写真3)。

床に座った途端、友人のマシガントークが炸裂した。言い残すことがないよう、思いついたことはなんでも口にする。門限が近づいているのだ。



写真3 台北駅のロビー

休日にはインドネシア人が床に座って談笑する姿がみられる(筆者撮影)。

移民たちの「ホーム」

「トコ・インドってのは、故郷を思い出せる場所なのさ。バクソとかサテとかを食うと懐かしくなるわけよ。まるで家にいるみたいなもんだよ。ホームだね、ホーム。」

なるほど、「ホーム」か。たしかに、彼らがトコ・インドでみせるくつろぎといえば、相当なものである。店に来て飲み物を1杯注文したきり、何時間も席を立たない人はザラである。ずっとスマートフォンをいじるか、隣の客とエンドレスなおしゃべりに興じるかしている。かといって、店員もこれを特に咎めることはない。むしろ、店員も積極的にそのおしゃべりに割って入っている。「ホーム」と呼べるほどくつろげる空間なのは頷ける。

先述のとおり、トコ・インドにはさまざまな人が集まる。居留ステイタスもエスニシティもさまざまである。なかには、インドネシア国籍をすでに手放して、中華民国籍(台湾籍)を得た人もいる。これだけバラバラな彼らに唯一共通しているのは、インドネシア出身という点だ。トコ・インドという「ホーム」は、インドネシアという結集の軸があって初めて成り立つ場所なのだ。

ひととおり語り終えると、友人は一瞬名残惜しそうな顔をみせた。それを打ち消すかのようにとびきりの笑顔を作り、ゆっくりと立ち上がった。

友人は、ギターケースからギターを取り出し、インドネシア語で軽快に弾き語りを始めた。周りにいたインドネシア人たちが集まってきた、手拍子を加える(写真4)。

ラブソングを何曲か歌ったのち、最後に



写真 4 ロビーで熱唱する人

週末の台北駅のロビーは一瞬にしてコンサート会場に変わる（筆者撮影）。

愛国歌「タナ・アイルク（*Tanah airku* 我が祖国）」をカッコよく現代風にアレンジして歌ってくれた。先ほどまで手拍子をしていた周りの人も、これにつられて口ずさむ。

Tanah airku tidak kulupakan
Kan terkenang selama hidupku
Biarpun saya pergi jauh
Tidak kan hilang dari kalbu
Tanahku yang kucintai
Engkau kuhargai

我が祖国を決して忘れない
今まで生きてきた思い出が詰まった国
遠く異国へ行ったとしても
心の中から消えることは決してない
我が愛する祖国よ
大切な祖国よ

週末の夜、祖国を想う歌声が台北駅に響いた。

引用文献

- 洪 珮瑜. 2011. 「族群産業與網絡—以印尼商店為例」國立中央大學客家社會文化研究所碩士論文.
- Lan, Pei-Chia. 2006. *Global Cinderellas: migrant domestics and newly rich employers in Taiwan*. Durham: Duke University Press.
- 玉置充子. 2020. 「台湾と東南アジア—『南向』をめぐる現状と展望」奈倉京子編『中華世界を読む』東方書店.

Kwanteebio and the Ethnic Chinese in Medan

Devin SUKARDI *

Flourished from plantation economy in the late nineteenth century, Medan, the capital of North Sumatra has developed itself into a cultural mosaic during the past one hundred and fifty years. Home to the Malay, Batak Toba, Javanese, Mandailing, Minang, Karonese, Acehnese, Chinese, Indian, and more ethnic groups, Medan thrived into a bustling commercial centre in Sumatra. The migration of labourers and traders during the late nineteenth and early twentieth century was one of the factors that contributed to the formation of a multiethnic society in Medan.

Among the 2.5 million population (2020), the ethnic Chinese constitutes approximately 10 per cent of the city's demography. Medan is historically a city with a high concentration of Chinese population. In 1930, the ethnic Chinese stood for 35 per cent of the city's population. The burgeoning population was caused by the gradual influx of Chinese from plantations in the suburbs, such as Labuhan Deli, Belawan, or Bandarbaru. Trade characterises the way of living of the ethnic Chinese in Medan, especially for the Hokkiens and Hakka Chinese. An increasing trend of the

Chinese population also prompted the need of establishing organisations that unify the interests of the Chinese. In this report, I will demonstrate the presence of Kwanteebio 関帝廟, the oldest Chinese temple downtown—its historical background and its function in Medan Chinese society. To begin, I would like to introduce my experience visiting the temple during festive moments with my family.

New Year Blessing

“Ah Pin, give me some of your clothes. I



Photo 1. Medan Kwanteebio in the Late Nineteenth Century. According to Knapp [2010], It Has the Same Structure and Layout as a Southern Hokkien House.

Photo from De Andere Helft: Geloof en Gebruiken van onze Oostersche Stadgenooten [Jansen 1934: 58].

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

shall take them to Kwanteebio and have them blessed,” said my mother two weeks before Chinese New Year in 2020. Every year, she would visit Medan Kwanteebio to offer a prayer for a prosperous year to come and have the inauspicious elements of the family members’ Chinese zodiacs corrected. On the first day of Chinese New Year, we would revisit Kwanteebio to pray for our well-being and safety for the rest of the year. I recall that everyone has a bundle of joss sticks in their hand, and the hall was filled with thick smoke that sends everyone’s prayers to the deities.

I never felt comfortable in that crowded temple with the suffocating smoke. I used to treat incense and smoke merely as tools to venerate these statues. However, recently I began to realise that the ethnic Chinese in my home community imagine the unseen world and the defied in a far more realistic way than we often visualise. The deities worshipped are not merely mythical protectors of ethics, morals, and virtues for the worshippers. Beyond that, the deities are binding elements that help maintain the harmony and interpersonal trust among the ethnic Chinese community in Medan and its surrounding territories. From this point, I started to realise the significance of this old temple. From what I have discovered through interviews, field trips, and archival research, the story of Kwanteebio tells us messages beyond its fact as a worshipping hall.

Anno 1884

Medan Kwanteebio is the oldest and inarguably the centre of Chinese deity worshipping in town. Located on *Kwanteebiostraat* or presently known as Jalan Irian Barat, the temple was founded in 1884. The temple was established under the initiative of Majoor Tjong Yong Hian 張榕軒 to promote the solidarity of the different groups of the Konghus or Cantonese [Buiscool 2019]. According to an inscription written by Majoor Tjong Yong Hian in 1885, the temple is dedicated to Kwantee Sengkun 閔帝聖君, Caibe Sengkun 財帛星君, and Hoktek Ciashin 福德正神, three familiar deities among the Chinese businesspeople in Medan.

Kwanteebio also enshrines Chinese popular deities, especially the gods worshipped by the Chinese originated from Chaoshan (Teochiu-Swatow) area. Lord Kwantee is naturally the temple’s prominent deity and placed at the centre of the worship hall. Other Taoist deities enshrined in this temple are Tjuse Nionio 註生娘娘 (goddess of conception and safe birth), the door god Be Bu 馬武 or Be Tjiong Kun 馬將軍. However, one could notice that upon the entrance of the temple, there sit a statue of Sakyamuni and the golden Phra Phrom or known as Si Bin Hut 四面佛 among the locals. At this point, one could see that the religious practice of Taoism and Buddhism among the Chinese people are commonly conducted

in one temple. Sometimes it is intriguing to know the inclusiveness of Chinese temples. I believe that on a personal level, one person might only believe in several deities as their guardians. A huge variety of deities enshrined in Medan Kwanteebio signifies that the worshippers are not from one background or belief.

Kwanteebio as Symbol of Unification

As mentioned earlier, the foundation of Medan Kwanteebio was initiated by Majoor Tjong Yong Hian, a Kwangtung-born Hakka subject. The temple's construction apparently was a project involving donators from Medan and its proximities, for instance, Penang. Cheong Fatt Tze 張彌士, a Kwangtung-born Hakka based in Penang, donated one thousand silvers. The Tjong Brothers, Tjong Yong Hian and Tjong A Fie 張阿輝, who eventually became the Chinese captains and majors in the East Coast of Sumatra, contributed one thousand and ten silvers combined (photos 2, 3). So far, I could not yet identify other donators and their affiliations, such as birthplace or dialect group. Nevertheless, the underlying motivation of the construction of this temple was told as an effort to promote solidarity and harmony among Cantonese subjects. But who are the Cantonese? Are they simply the Cantonese-speaking people born in Kwangtung, or perhaps people from different dialect groups like Hokkien,

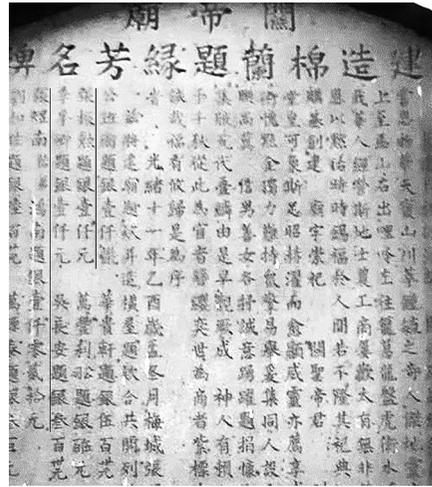


Photo 2. List of Contributors who Financed the Construction of Medan Kwanteebio. Names of Cheong Fatt Tze, Tjong Yong Hian, and Tjong A Fie Are Engraved on the Founding Plaque. Courtesy of Ms Henny Angkasa, Medan.

Teochew, or Hakka born in the soil of Kwangtung?

Before Chinese nationalism sparked in the early 20th century, the Chinese overseas community certainly was a divided family with different loyalties. A part of it was affiliated to anti-Qing secret societies, while others might have sworn their allegiance to the Qing Emperor. My high school teacher once said that Chinese people regard harmony highly, but on some occasions lacking cooperation, as expressed in the Chinese idiom *yi pan san sha* 一盤散紗. By the time Medan Kwanteebio was erected, cleavages and confrontations among Chinese subjects were issues that caused social unrest. Queeny Chang, the eldest daughter of Majoor Tjong A Fie, recalled



Photo 3. Main Donators of the Kwanteebio's Construction: (from left) Majoor Tjong Yong Hian, Majoor Tjong A Fie, Cheong Fatt Tze.

Portraits from KILTV-Leiden Digital Library and Tjong A Fie Mansion Museum Archive, Medan.

in her autobiography *Memories of a Nonya* [1981: 152] the antagonism between Chinese dialect groups and described how his father had succeeded in stabilising the situation:

The Sultan's private coach, which two years before sent us on our trip to China, brought us back to Medan where a large section of the Hakka and Hokkien community had gathered at the station to greet the son-in-law (here, Queeny Chang's husband) of their Chief (here, Majoor Tjong A Fie). Through our union, the former antagonism that existed between these two dialect groups had come to an end.

Kwanteebio was founded not only as a place of worship. It was established by the local prominent Chinese like Tjong Yong Hian and Tjong A Fie with solid intention

to unify the Chinese subjects beyond their birthplaces, dialects, or professions. Lord Kwantee, to whose honour this temple was built, hence became the righteous witness of solidarity, trust, and camaraderie among Chinese subjects who share similarities and differences. Kwanteebio is not only a place that offers spiritual consolation, but most importantly, for the elites, it was a place to manoeuvre the social and political life of their Chinese subjects. We came into a concession that a prestigious Chinese temple like Kwanteebio was built and financed by the so-called "respectable Chinese" at the time. These respectable Chinese were trusted by the colonial authorities to supervise their Chinese subordinates, including the underground organisations as well.

The Chinese in Medan was a diverse community before the unifying idea of *Zhonghua*

中華 began to dominate in the late-Qing and early Republican era. However, it should be noted that the generalisation of the Chinese as a single group constituting the Foreign Orientals (*Vreemde Oosterlingen*) has started far before Chinese nationalism sparked. Local Chinese chiefs were, therefore, appointed middlemen to maintain peace and order of the Chinese subjects. As the Hokkiens, Cantonese, or Hakka were generalised as 'Chinese' by the colonial authority, it could be assumed that the Chinese community leaders had to treat and solve any disagreements among the sub-ethnic groups as problems of the 'Chinese.' The establishment of temples or organisations beyond sub-ethnic groups is one of the solutions. Hence, Kwanteebio was a projection of the Chinese leaders' authority to stabilise any turbulence in the community of their subjects. Queeny Chang, however, failed to address further her father's political intervention and the role of Kwanteebio in unifying the Chinese society back then. The presence of Medan Kwanteebio as a social and political arena during the colonial era is to be studied further.

Kwantee and the Ethnic Chinese in Medan

During the past one hundred and thirty years, Lord Kwantee has been worshipped by people in Medan seeking clues for righteousness and justice. From the Chinese *majoors* such as Tjong Yong Hian and Tjong A Fie, Kwantee

is venerated by business people, lawyers, or scholars. Some people also believe in the spirit of Kwantee, to my surprise, to cure an ill body. Queeny Chang [1981], in her autobiography, also introduced an anecdote of her younger brother's experience with Kwantee:

The spirit of Kwan Ti had entered the body of the medium and had given fu (hu-po). The fu was burned and the ashes, mixed with water, was given to my little brother to drink.

Nowadays, when people have their freedom to choose what to see and what to believe, I have always been contemplating how the worshipping of popular deities would last until the next decades and centuries. Would the younger generations share the reality in mythical imagination that their parents had? Would people from my generation pass down the view of heaven, earth, and the underworld, which we inherited from our ancestors?

Kwanteebio now became a souvenir from the pioneers, and the spirit of its founding is standing between memory and forgetting. My previous visit to Kwanteebio brought me the realisation that research on Chinese *kapitans* shall not be concentrated merely on their properties or legacies that vividly demonstrate their business acumen. My research will study further the social and political functions

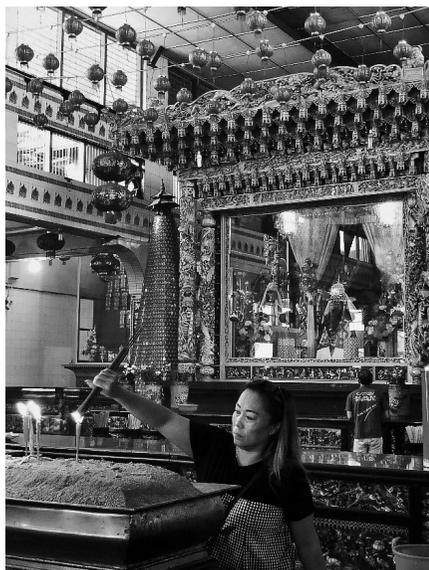


Photo 4. A Lady Burning Joss Sticks in Front of the Altar of Lord Kwantee.

Photographed by the author.

that Chinese temples in Medan performed during the Dutch colonial era. The correlations between Medan Kwanteebio, the Tjong brothers and Medan Chinese are yet to be explored further.

References

- Buiskool, Dirk Aedse. 2019. *Prominent Chinese During the Rise of a Colonial City: Medan 1890–1942*. Doctoral Thesis, Utrecht University, Utrecht.
- Chang, Queeny. 1981. *Memories of a Nonya*. Singapore: Marshall Cavendish Editions.
- Jansen, Gerard. 1934. *De Andere Helft: Geloof en Gebruiken van onze Oostersche Stadgenooten*. Medan: Köhler & Co, pp. 59–64.
- Knapp, Ronald. 2010. *Chinese Houses of Southeast Asia: The Eclectic Architecture of Sojourners and Settlers*. Singapore: Tuttle Publishing.

妖怪ではない「カッパ」

—岩手県遠野市の「民話」文化の古層に向かって—

森内 こゆき*

「妖怪の研究してるんだよね、カッパ好きの女の子がいるよ！」
遠野に着いて、宿泊施設を運営する女性に開口一番にこう言われた。筆者はカッパに会いに訪れる人がいるとは、さすが「民話のふるさと」遠野だな、と思った。日常生活で

は「カッパ好きの女の子」にはなかなか出会えないであろうし、驚くべきことであつたに違いない。しかし、筆者は遠野までの道中ですでに不思議な出来事に巻き込まれており、このとき地に足のつかない感覚だったので、「カッパ好きの女の子」への理解が追いつい

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 盛岡市・報恩寺五百羅漢像



写真2 カップパの人形

ていなかった。

盛岡から遠野までの道中で、筆者は「見える」人に出会っていた。その人は50代の男性で、左足を引きずりながら報恩寺の羅漢堂を拝観していた(写真1)。報恩寺は岩手県盛岡市にある曹洞宗系寺院で、1394年(室町時代・応永元年)に当地を治めていた南部氏によって創建されたと伝えられている。藩政末期まで南部藩から手厚い保護を受け続けつつ、民衆によって厚く信仰されたその寺院堂内には、立派な金の観音像を三方から取り巻くようにして、同じく寄木造に立派な金のメッキが施された五百羅漢像が安置されている[岩手県編纂 1963: 1360-1375]。彼が「見える」といったのは、この何百体もの「羅漢さん」が「動いている」のが「見える」ということであった。彼は20年程前に死を意識するほどの強烈な出来事を経験し、それを期に「見える」ようになったのだと言う。彼は遠野までの道中にも「神さん」の声を「聴いて」は、その声の在り処である寺社仏閣へと筆者を案内し、たくさんの「神さん」

に会わせてくれた。

そうした道程を経て遠野に到着した筆者は、狐につままれたような心地で宿泊施設の女性と話していた。そのような感覚のなかで、筆者はその「カッパ好きの女の子」も「見える」人のように霊的存在の姿が見えたり、声が聴こえたりするのだろうかと考えていた。その子も「見える」人のように、超能力者集団か何かに所属しているのだろうか、それとも見えないがゆえに、かの遠野でならカッパに出会えるのではないかとここへやって来たのだろうか。

遠野に到着した3日後、その女の子と会うことになった。彼女はカッパが好きというのは本当だと語ってくれたが、彼女が好きなカッパは小学生の頃から彼女が持っているカッパの人形のことだという。その人形の写真を見せてもらったところ、なんと同じものを筆者も所持していた(写真2)。彼女はその人形について詳しく、この人形を製造・販売していた会社が倒産したためこの人形はすでに販売されていないこと、そのためこの人

形を持っている世代はかなり限られていること（彼女と筆者は同い年、当時24歳である）などを教えてくれた。この人形がきっかけでカッパが好きになり、幼い頃から家族に連れられて度々遠野を訪れては、カッパ淵や伝承園などのカッパにまつわる観光地で遊んでいたそうだ。

彼女は2020年10月に地域おこし協力隊として遠野に移住してきたのだが、今回の移住とカッパは無関係だという。何度も遠野を訪問するうちに、遠野の土地柄や、伝統芸能である獅子踊りなどに魅力を感じ、移住することに決めた。移住してからは宮守川上流組合で農作業や商品生産に携わっている。彼女と対面したこの日は、組合の作業所や販売所を案内してもらったほか、猟師の男性を紹介してもらったり、遠野の民話や伝説に登場する続石やキツネの祠などへ連れて行ってもらった。あちこちを巡った最後に、遠野七観音のひとつである宮守観音を訪れた（写真3）。日が沈む間際だった。彼女は以前、宮守観音の裏山でシカと対峙し、畏怖を感じたことがあると語った。宮崎駿監督映画『もののけ姫』に登場する「シシ神」を想起したという。

シシ神は作中では森の化身であるが、最後に人間によって殺される。彼女に紹介してもらった猟師によれば、「害獣」を追い払ってほしいという依頼は後を絶たないという。彼は本職である山中での狩猟とは別に、里野においてきた熊を駆逐したり、観光地にできた巨大な蜂の巣を駆除したりしている。遠野での暮らしは野生動物や昆虫と隣り合わせで、そ



写真3 遠野市・宮守観音堂

の恩恵と被害を受けつつ彼らは生活している。

その夜、彼女と筆者は一緒に夕食を食べた。そこで再びカッパの話になった。彼女は彼女のカッパと会話できるという。カッパは一般的には妖怪に分類されるが、彼女にとってはどうであろう。彼女にとってカッパは妖しいものでも、怪しいものでもない。彼女とカッパとは、すでに愛ある関係で結ばれている。

次の日、筆者はカッパ淵と伝承園を訪れた。この2つの観光地の管理人であるカッパおじさんは、「カッパの民話は、埋もらされてきた人たちの話」だと語った。それは彼女らにとって比喩ではない。彼によれば、カッパは飢饉の際に川に流された赤子に由来するという。だから遠野のカッパは赤い。遠野には、盛岡と同様に五百羅漢像があるが、この五百羅漢像は江戸時代の天明の飢饉で亡く



写真4 遠野市・五百羅漢像

なった人々を供養するために、大慈寺の和尚・義山が石々に掘ったものであると伝えられている[遠野市編纂委員会 1976: 14]。この遠野の「羅漢さん」たちは山の中の自然石に刻まれており、現在では石ごと地面に埋もれ、苔生したものも多い(写真4)。そして実際に飢饉で亡くなった人々は、幕府や南部藩からの課税や取締の圧力、そして何より自然の猛威によって、土に「埋もらされた」人たちであった。こうした人々について語られた口頭伝承であるから、民話は遠野では本当に「埋もらされてきた人たちの話」なのである。

数日前に出会った「見える」人とは、「神さん」に呼ばれたので、遠野の五百羅漢のふもとにある卯子酉神社を一緒に訪れていた。しかしながら、五百羅漢像が横たわる山中には入らなかった。埋もれている「羅漢さん」を誤って踏んでしまいそうで怖いので、「羅漢さん」がいる山中には行かないと彼は言っていた。彼にとっては盛岡の「羅漢さん」も遠野の「羅漢さん」も、信仰や供養といった宗教的な感覚と結びついていた。

南部藩の居城のあった盛岡の「羅漢さん」

が中央幕府あるいは京の都と藩との間の巨視的な関係から説明されることが多いのに対して、遠野の「羅漢さん」は、農民の視点からみた個々人の死にまつわる微視的な歴史のなかに位置づけられている。民話の背景にあるこうした微視的な歴史を真摯に受けとめている人たちには、「カップ好きの女の子」をはじめとする地域おこし協力隊の人々も含まれる。彼女の先輩には、地域おこし協力隊として遠野にやって来て、そのまま遠野で結婚・起業し、遠野に根を張った人がいる。彼は移住後に『遠野物語』と遠野の土地性との密接な関係に魅了され、『遠野物語』を題材とした数々の企画を遠野の内部で立ち上げている。その彼と他の移住者ら、そして遠野で生まれ育った人々との関係は、未だ筆者の深く知るところではないが、彼らの中にはひとつの共有された知があるように思われた。彼らは、みな遠野の魅力を十分に理解しつつも、それを外部に広めようと試みるより先に「遠野についてもっと知りたい」、「まずはたくさん地元の人と遠野の良さを共有したい」と語った。地元の人と遠野について語り合うためには、地元の人と同じかそれ以上に遠野について詳しくなければならない。彼らはやみくもに遠野で見知った民話文化を世界に発信しようとするのではなく、ひたすらに遠野の魅力を掘り下げている。そのような彼らの取り組みは、彼ら自身の意図を越えて、世界から注目を集めつつある[多田・富川 2021]。

今、遠野では「埋もらされてきた」民話を発掘するどころか、民話の奥深く深くにある自然の「わからなさ」にまで掘り進めようと

する、大きな動きがおこっている。遠野で暮らす人々は、自然世界のなかに自らの知識が及ばない/身体的な力が及ばない「わからなさ」が潜んでいることを多かれ少なかれ知っていて、その未知のものがすべて既知に変わることには決してないということを悟りつつも、その「わからなさ」を虚心坦懐に探求している。筆者もカップに導かれて、その大きな流れに巻き込まれている。

引用文献

- 岩手県編纂. 1963. 『岩手県史』5 近世篇 2. 名著出版.
遠野市史編纂委員会編. 1976. 『遠野市史』3. 万葉堂書店.
多田陽香・富川 岳. 2021. 〈https://note.com/iwate_lf/n/n3cc662dc3ab2〉 (2021年3月17日)

食でつながる国境なき世界

—日本とレバノン料理—

中西 萌*

はじめに

世界三大料理といわれたら、どの国の料理を思い浮かべるだろうか。フランス料理、中華料理、そしてレバノン人ならきっこう答えるだろう、「レバノン料理」と。どの3つの国の料理を世界三大料理に入れるかについては諸説ある。このレバノン料理とは、かつての歴史的シリア地域、つまり現在のレバノン、シリア、ヨルダン、パレスチナ/イスラエル、トルコ南西部でみられる料理の総称である。レバノンは移民送り出し大国であり、レバノンからの移民が世界各地にレバノン料

理屋をもたらしたことから、歴史的シリア地域の代表選手としてその名が知られるようになった [黒木 2007: 50–60]。歴史的シリア地域の料理には、地域ごとに多少の差異があることを承知したうえで、本稿ではこれを広義の「レバノン料理」と呼ぶことにする。

レバノンでの出来事

料理は、異文化世界と自分の間の目に見えない境界を取り払う最も簡便なコミュニケーションツールである。レバノンでのフィールドワークを行なった私にもそのような現地経

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

験がある。それは、レバノン南部に位置するサイダーの旧市街にあるスーク（アラビア語で「市場」を意味する）で、私がとある香辛料を探していたときのことだった。香辛料の専門店にて、鮮やかでカラフルな香辛料が山のように積まれていた。しかし、私は探し求めているスパイスの名前が分からず、店主に何が欲しいのかうまく伝えられずにいた。そんな困り果てている私を見ていたレバノン人と英国在住のシリア人が手助けをしてくれた。「あなたが欲しいのは、セブン・スパイスのことじゃない？」このやりとりをきっかけに、彼女たちとの知遇を得ることになり、その交流は今でも続いている（写真1）。

セブン・スパイスとは、レバノン料理で使用される基本的な調味料である。地域差はあるものの、胡椒、ナツメグ、クミン、コリアンダー、クローブ、シナモン、オールスパイスを調合したものが主流である。7種類のスパイスからなるが、もちろん日本の七味とは異なったものである。まったく辛くなく、それどころか、ほんのりと甘みさえ感じられ



写真1 レバノン、サイダーにて、香辛料を探す筆者（筆者友人撮影）

る。セブン・スパイスはむしろ、和食の「さしすせそ（さとう、しお、す、せうゆ、みそ）」のような位置づけだろうか。

レバノン料理といえば、唐辛子などの強い刺激物を想像され、日本の友人に「私には向いていないかもしれない」と言われたことがあった。しかし、少なくとも私がレバノン滞在中に出会った料理は、香辛料をふんだんに使いはするものの、決して唐辛子系の辛さはなく、マイルドな味付けであった。シリア北部アレッポなどでは唐辛子をたくさん使うと聞いたことがあるが、私が想像するにそのような地域はごくわずかであるように思える。レバノン料理において香辛料は、色付けや、保存、素材の臭みをとるために用いられるほか、和食の出汁のように、味に深みを付けるために用いられる（写真2）。

日本と「なんちゃってレバノン料理」

帰国後、セブン・スパイスを使って何度かレバノン料理を作ってみた。特に、コロナ禍が始まりステイ・ホームを推奨され始めてからは、本格的に挑戦するようになった。海外



写真2 レバノン、サイダーの香辛料専門店（筆者撮影）

に渡航できない中、私の中東への想いは溢れかえっていた。その收拾がつかない気持ちを埋めるかのように、YouTubeやウェブサイトで中東料理のレシピを検索しては、レバノン料理をみようみまねで次々と作り、家族に振る舞っていた。

その写真をSNSに投稿すると、長らく連絡を取っていなかった中東諸国出身の友人らが褒めてくれた。しかし、私が作るレバノン料理は、日本の一般的なスーパーマーケットで買った食材と、中東から持ち帰ってきた限られた調味料からできた、いわば「なんちゃってレバノン料理」だった。きっと、中東諸国出身の友人からすると、違和感のある料理でしかなかったように思う。そのため、投稿する文章は日本語のみにしていた時期もあったが、彼らには、私がレバノン料理を作ったことを瞬時に気づかれてしまった。そのうえ、「君が作ったのって、もしかしてレバノン料理かな。料理の上にかかっているナッツはバターで炒めるともっと美味しくなるよ」などと、的確な助言までもしてくれた。

レバノン料理は、次第にコミュニケーションツールとして機能し始めた。幾度となく、「なんちゃってレバノン料理」を作ってはSNSで投稿しているうちに、冒頭で紹介したレバノンのサイダーで出会った彼女たちが、「レバノン料理の作り方を教えてあげる」と声をかけてくれた。そこで、事前にレシピを決めて必要な材料を各自調達し、Zoomを通してオンライン料理会を開いてもらえることになった。ただ、私たちはそれぞれ、日本、レバノン、英国に住んでおり、時差を調

整する必要があった。日本とレバノンの間には7時間の、英国との間には9時間の時差があるため、私にとっては夕食、彼女たちにとっては昼食に向けての料理作りとなった。レバノンにおいて昼食は、1日の食事のうち主要なものとして位置づけられており、さらに食事の時間も午後2時頃からということが多く、私たちが抱える時差は、問題というよりはむしろ、互いの生活文化における都合を絶妙に満たしてくれた。

私は、レバノン料理の本当の作り方を教えてくれる日を楽しみに、うきうきと食材集めにスーパーに出かけた。しかし、その浮かれた気持ちも束の間、別の壁が立ち上がった。なぜなら、事前にリストアップされた、ハルミチーズや、ざくろ、超濃厚なヨーグルトなどの食材は、大型スーパーですら手に入らないものが多いことに気がついたからである。さらに、フズ（平たいパン）、ドライフルーツ、ナッツ、ヒヨコマメ、モツァレラチーズ、パセリなどを揃えると、食材費が高額になってしまった。普段、私ひとりで作るときは、日本にある食材で作れるレバノン料理のレシピを自然と選んで調理していたため、中東地域にとっては日常的な食材でも、日本にとっては高級食材だということに気がつかなかった。中東は日本から遠く離れた場所にあることを改めて感じさせられた。

オンライン料理会当日、手に入らない食材は、それらしき代用品でなんとか辻褃をあわせた。その日教わった料理に、「ファテット・ホンモス」というものがあった。通常のホンモス（ヒヨコマメのペースト）とは異なり、



写真3 私が作る「なんちゃってレバノン料理」
写真の北東の位置にある料理は「ファテット・ホンモス」。これは送って欲しいと言われたその写真（筆者撮影）。

カリカリに焼いたフズズ（ピタパンで代用）の上にヒヨコマメをのせ、その上からヨーグルト、タヒーニ（ごまペースト）、スマックをはじめとする香辛料を混ぜたソースをかけて浸し、さらにその上からドライフルーツ、ナッツ、パセリやパプリカパウダーをかける。ソースはスマックの赤色とヨーグルトが混ざった結果、やさしいピンク色をしていた。このスマックは、日本の赤じそふりかけと味が非常に似ており、親しみをもてた。ファテット・ホンモスはヒヨコマメを大量に使うせいか、すぐにお腹がいっぱいになる一品である（写真3）。

しかし、なぜ柔らかいフズズを一度焼いて固くした挙句、ソースをかけて浸すのだろうか、と疑問に思った。「フズズを家で保管していると、食べる頃には固くなっているのだから、それを焼いてカリカリにして、クルトンのように使うのよ」と彼女たちが教えてくれた。日本では非合理的に思える多くの過程は、実はレバノンの生活で理に適っている



写真4 日本で揃う材料、調理器具で作るシャールマ
シリア出身ご家族のご家庭にて（筆者撮影）。

ということを理解した。

この、「なんちゃってレバノン料理」は日本在住のレバノンおよびシリア出身者を対象としたフィールドワークをしている間も、彼ら・彼女らとのコミュニケーションをはじめうるうえでの手助けとなった。オンライン料理会で習得したレシピをもとに、もう一度、今度は日本で容易に揃う食材を代用してレバノン料理を作った。その写真を初対面のシリア出身の方に見せたとき、「君が作った料理の写真を故郷にいる家族に見せたいから、その写真を送ってくれないか」と言われた。

また、とあるシリア出身のご家族は私を家に招待し、故郷の料理を振る舞ってくれた。ご家族と食事を共にする中で、新たな発見もあった。たとえば、レシピにパセリと書いてある際、私はこれまで日本の一般的なパセリを使ってきた。しかしレバノン料理で使われるパセリは、日本のものと形状がまったく異なる代物であることを知った。そのうえ、野菜だけでなく、調理器具や盛り付け皿にも違いが見られた。日本と中東では、食事をとり

まく環境がまったく異なることには、オンラインでただ検索するレバノン料理のレシピだけでは気づくことができなかった（写真 4）。

彼ら・彼女らは私と同じ条件で、日本に住み、日本で手に入る限られた食材を用いてレバノン料理を作っている。彼ら・彼女らの試行錯誤の結果できた、和洋折衷ならぬ「和中東折衷」なレバノン料理を食べて初めて、私の頭の中で勝手に作り上げていた「なんちゃってレバノン料理」というレバノン料理像は消えた。そこには、本物のレバノン料理が日本の中で生きていた。

おわりに

食を通すと異文化とのコミュニケーションがより一層築きあげやすくなる。日本と中東は地理、歴史、文化的な接点が限られており、互いのことを知るためのハードルは非常に高いように思える。しかし、万人に共通す

る食事というものを媒介にして、同じものを食べる、相手の地域の料理を作る、という動作を共有することでコミュニケーションの障壁を取り除くことが可能になる。今日、コロナ禍での水際対策で人々の往来が制限され国境が厚みを増すとともに、海外がますます遠い存在のように感じてしまう。しかし、食には国境のような明確な境界がみられない。料理から世界を広げると、相手とつながりが生まれやすい。そこには、互いの国境という概念を乗り越えているのかもしれない。そんなユートピアのようなことを、レバノン料理を口にしながらいふけた。

引用文献

黒木英充. 2007. 「歴史的シリア」大塚和夫編『世界の食文化 10 アラブ』農山漁村文化協会, 48-87.

ブルーリ潰瘍との出会いとボーイスカウト運動

小川 雄 暉*

筆者は、西アフリカ・ガーナ共和国で顧みられない熱帯病の 1 種であるブルーリ潰瘍 (*Buruli ulcer*) 患者の経済的・社会的影響や治療行動について研究している。本稿では、

筆者とブルーリ潰瘍との出会い及びその出会いをもたらした「ボーイスカウト運動」に焦点を当てながら、研究に至った経緯を述べていく。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ボーイスカウトとは

あなたはボーイスカウトと聞いて何を思い浮かべるだろうか。キャンプやハイキングなどの野外活動だろうか。駅やスーパーの前で行なう募金や、地域の清掃などのボランティア活動だろうか。マラソンや駅伝の時に交通整理をしたり、高校野球で選手たちの前でプラカードを持って行進したりする姿だろうか。これらすべてが、ボーイスカウト運動の一面である。

1907年のイギリス、ロバート・ベーデン-パウエル卿（Robert Baden-Powell）が20人の子どもたちと行なった7泊のキャンプがボーイスカウト運動の始まりである。ベーデン-パウエルはこのキャンプの経験から、「少年たちの旺盛な冒険心や好奇心をキャンプ生活や自然観察、グループでのゲームなどの中で発揮させ、『遊び』をとおして、少年たちに自立心や協調性、リーダーシップを身につけ」させることが大切だと考えた。キャンプの翌年『Scouting for Boys: A handbook for instruction in good citizenship』という本を著し、ここにボーイスカウト運動は始まった〔ボーイスカウト日本連盟〕（写真1）。

1908年、日本にボーイスカウト運動が伝わると、さっそく全国各地に少年団が作られた。その後、全国的な統一組織となる動きがおき、1922年4月13日に「少年団日本連盟」が創立し、ボーイスカウト国際事務局に正式加盟した。現在は、47都道府県すべてで活動が展開され、10万人以上（スカウト5万8,677人、指導者4万6,409人）が活動している〔ボーイスカウト日本連盟〕。

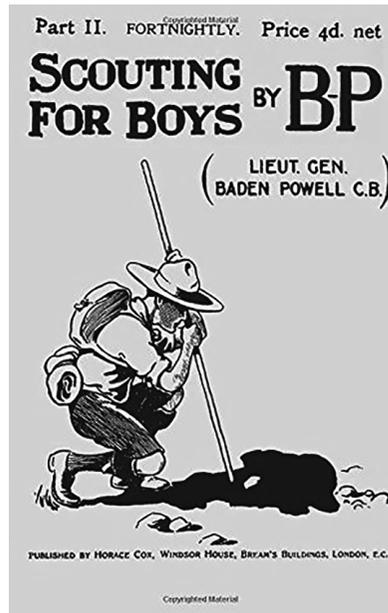


写真1 ベーデン-パウエル著『Scouting for Boys』

そんなボーイスカウト運動を筆者は、小学5年生から続けている。筆者が10年以上にわたり継続する原動力となったのは、ジャンボリー（Jamboree）の存在が大きい。ジャンボリーとは、4年に1度行なわれるボーイスカウト運動のキャンプの祭典である。初めて参加したのは、筆者の地元、静岡県朝霧高原で2010年に行なわれた第15回日本ジャンボリー（以下15NJ）である。日本のみならず海外41カ国から795人、総勢1万9,382人が参加したこの祭典の最大の思い出であり天敵は雨であった。日程の前半は雨が降り続いたため、牧草地はまるで餅のような粘土となり、10mも歩かないうちに履いていた長靴が脱げて埋まってしまうほどだった。また、朝になるとテントがビショビショになるほどの夜露にあたり、立ちかまどで炊

事をしようとしても、湿気た薪にはそう簡単に火がつかなかった。そんなひどい環境ではあったが、日程の後半は天気も回復し、富士山が初めて顔を出した時には、あちこちから歓声が上がった。

こうした、厳しい条件下で生活する経験を積んだことは、大学院でのフィールドワークで大いに役立った。使うことはなかったものの、どんな環境であっても睡眠をとろうという意図から、普段のボーイスカウト活動で使っているテントと寝袋を持参した。また、80 リットルのバックパックとスーツケースの 2 段装備で渡航したが、これは常に片手を、できれば両手を開けておいたほうが至便であるというボーイスカウトの教えを実践したものであった。

2016 年、ブルーリ潰瘍との出会い

年月は流れ、筆者は大学に進学した。サークルを探すと、ボーイスカウトサークルがあることを知り、京都の地でもボーイスカウトを続けることができたのである。2 年生になった 4 月、集会をやるという連絡があった。筆者がガーナ共和国と出会ったのも、研究対象としているブルーリ潰瘍と出会ったのもこの集会がきっかけである。集会は二部構成となっており、第一部では福西和幸氏¹⁾が講演して下さった。

自己紹介と顧みられない熱帯病、ブルーリ潰瘍の概略を説明したあと、福西氏は 1 枚の写真を提示した。それは、直径 6 cm にな

ろうかというブルーリ潰瘍にかかった患者の写真だった。さらに、「これだけの潰瘍があっても病院に行かない人、行けない人がいる。病院に行って早めに治療すれば治るのに、放置してしまい取り返しのつかないことになっている」と福西氏は続けた(写真 2)。

筆者は、この言葉をうまく理解できなかった。ブルーリ潰瘍は命に関わらない病気だというが、ここまで重症化してもなお、病院に行かないという選択が理解できなかった。アフリカに貧しい国が多いことは、ニュースや高校の地理の授業などで当たり前のように知っていた。しかし、病院に行かない、行けないという現状があることは想像できなかったのである。

その後、ガーナやトーゴ、ベナンでの福西氏の活動や研究の報告があった後、「ボーイスカウトとして、何か支援や協力できることはないだろうか」と切り出してきた。しかし、筆者らができそうなことは思いつかなかった。現地には物資、医療従事者、設備のどれもが足りていないうえ、ブルーリ潰瘍に



写真 2 ブルーリ潰瘍患者の例
左手甲に痕が残っている。

1) 当時、神戸国際大学講師。現九州国際大学教授、国際センター長。

対する「正しい」知識が不十分であると感じた。しかし、こうした状況を好転させるために「真に」必要な支援は、やはり自分の目で見、話を聞いて、肌で感じなければ分からないと思った。だからこそ、その講演が終わった時には、「ガーナに行きたい」と強く感じていた。筆者と同じ思いを抱いたスカウトは他にもいたため、福西氏と指導者たちは「ガーナに行けるように検討してみる」と約束してくれた。

あるブルーリ潰瘍患者との出会い

こうしてガーナプロジェクトは水面下で動き始めた。しかし、いざアフリカに行くのはそう簡単なことではなく、安全管理、予算の承認、行動計画の策定など大人たちがやるべきことは無数にあったはずである。こうした準備に目途が立った2017年3月、ガーナプロジェクトチームの第1回の会議があった。そこには、学校も学部も違う大学生4人が集まっていた。筆者らは月1回ペースで会議を重ねながら、ガーナ渡航に向けた準備を進めていき、2017年9月、1週間渡航した。現地では村やヘルスセンターなどを4日間で10ヵ所以上訪問した。その中で、あるブルーリ潰瘍患者と出会ったことが、筆者を研究の道に進ませることになったのである。

その患者は50代の女性であった。彼女は家の暗い一室でほぼすべての時間を過ごしていた。なぜなら、彼女の左ひざは骨が見えるのではないかとというほどに筋肉がなかったか

らである。家族の話によると、30年以上前にブルーリ潰瘍を発症して以来一度も治療を受けておらず、こうした状況であるため、人目に触れないようにしているのだという。この現状を見た時、私は福西氏が講演で言った言葉を改めて思い出し、またなぜこのような患者が存在するのか、その原因を知りたいと心から思ったのだった。この出会いがなければ筆者は研究の道に進んでいなかったと断言できるほどの強い衝撃を受け、その村を後にした(写真3)。

ガーナと日本、ボーイスカウトのつながり

4日間の村やヘルスセンターへの訪問が終わり、首都アクラに戻った筆者らはボーイスカウトガーナ連盟(Ghana Scout Association)を表敬訪問した。目的は、筆者らの活動の周知と、次年度以降のコネクション作りのためである。ここで、ガーナのボーイスカウト運動の概要を述べる。ガーナ²⁾にボーイスカウトをもたらしたのは、サミュエ



写真3 50代女性が住んでいた村

2) 当時は英領ゴールド・コースト。

ル・ウッドという人物であった。彼はイギリスの新聞社「THE SHEFFIELD WEEKLY」が主催した絵画コンテストで優勝し、商品として数冊の本と新聞の購読権が与えられた。そのうちの1冊が『Scouting for Boys』だったのである。彼はこの本を読み、スカウトのグループを作りたいと考え、ロンドンのボーイスカウト英国本部に手紙を書いた。1912年1月4日にゴールド・コースト・スカウトの設立許可が与えられ、これが現在のボーイスカウトガーナ連盟につながっている[Ghana Scout Association]。2019年には、1万3,496人がスカウトや指導者として活動している[World Organization of the Scout Movement]。

さて、ガーナ連盟の応接室に一歩入った筆者の目を引いたものは、部屋の隅の戸棚に飾られていた一枚の楯である。その楯には、15NJ参加のお礼と書かれていたのである(写真4)。代表の挨拶や写真撮影、記念品の交換などが終わり、自由に質問できる時間になると、真っ先にこの楯を踏まえて「ガーナ連盟から15NJに参加した人がいるのですか？」と質問した。すると、何人かのスカウトがはるか遠く離れた日本を訪れて、15NJに参加したというのである。「実は私も15NJに参加した。さらに会場は私の地元である」というと、連盟長と筆者は立ち上がり、堅い握手とハグをした。日本からガーナに贈られた楯と再び日本人が対峙する。そして、その楯の内容は、筆者が現在までボーイスカウト活動続ける原動力となった15NJについてだった。この運命的な出来事は、ガーナで研究したいと思わせるには十分すぎ

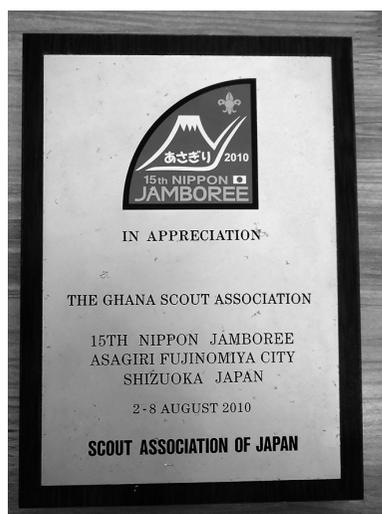


写真4 ガーナ連盟に送られた15NJ参加お礼の楯

るほどであった。

1年後の2018年9月、筆者はガーナ派遣プロジェクトで再び訪れ、研究への思いはより確固たるものになった。大学院に進学し、3度目の訪問となる2019年9月、前2回とは違いガーナには1人で降り立った。期間も1週間から3ヵ月間になり、未知の経験が待ちかまえていた。しかし、これまでにガーナで会ったブルーリ潰瘍患者ら、お世話になった医師や看護師の方々が待っていると思うと、足取り軽く空港を出発したのであった。

引用文献

- Ghana Scout Association. <<https://www.ghanascout.org/history/>> (2021年5月20日)
- World Organization of the Scout Movement. <https://www.scout.org/sites/default/files/library_files/WOSM%20Census%202019_0.pdf> (2019年12月31日)
- ボーイスカウト日本連盟. <<https://www.scout.or.jp/about/>> (2021年5月20日)